

# 的外



みのる法律事務所  
弁護士 千田 實  
〒021-0853  
岩手県一関市字相去57番地5  
TEL : 0191-23-8960  
FAX : 0191-23-8950

みのる法律事務所便り  
第340号  
平成30年8月

みのる法律事務所 <http://www.minoru-law.com/> ✉ [minoru@minoru-law.com](mailto:minoru@minoru-law.com)



いなべん だべんく

田舎弁護士の駄弁句 ③1

いつまでも  
あると思うな  
親と金  
ハッと気が付く  
能力も同じ



平成30年8月22日  
青空浮世乃舎

「いつまでもあると思うな親と金」という教訓は、誰でも知っています。最近親と金だけではなく、なにかをやれる力、例えば散歩する力も、書き残しておく力も、いつまでもあるものではないことに気がきました。

私より年少の会社経営者の方などで、認知症になったり、死んだ先のことを心配し、頭がしっかりしているうちに任意成年後見契約書や遺言書などを作って置きたいという人が少なくありません。

何かをやれる能力だって、いつまでもあるものではありません。後期高齢者などという年齢となったら、いつ認知症になっても、死んでも不思議ではありません。

そんな思いを、親しくさせて戴いている方々やクライアント（相談者）の皆様より教えられ、ハッと気付く今日この頃です。やれる能力のあるうちにやっておきたいことは、まず着手したいものです。

いなべん  
田舎弁護士の駄弁句 ③2

不安こそ

最大の敵と

わきま

弁えよ

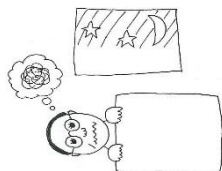
分からぬ先に

も おろ

氣を揉むは愚か



死？



平成30年8月22日

青空浮世乃捨

「不安」とは、「なりゆき・結果・ようすなどがはっきりわからず、悪いなりゆき・結果も予想されて落ち着かないこと」（角川必携国語辞典）です。この先はどうかと考える場合に、必ずうまくいだろうと考える人より、最悪ななりゆきや結果を予想してしまう人の方がどちらかという和多いのではないかという気がします。

でもこの考え方は、愚か、つまり知恵や考えなどが欠けて、行き届かない、と言えそうです。なぜなら、これから先のなりゆきや結果はどう予想したって分からないのです。分からないことに氣を揉んで、落ち着かず、いらいらしては楽しくありません。「下手の考え休むに似たり」どころか、休んだ方が肉体的にも、精神的にもはるかにいいのです。

「人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くすのみです」といういなべんの哲学においては、不安は、人類最大の敵ということになります。

## いなべんの哲学



人生は、  
いまの一瞬を、  
まわりの人といっしょに、  
楽しみ尽くすのみです。



後期高齢者となったと思ったら、あっという間に1年が過ぎました。「光陰矢の如し」です。

私淑（深く尊敬する人を、ひそかに自分の師と決めて慕い学<sup>した</sup>ぶこと—角川必携国語辞典）する、84才の誠信堂医院の院長先生、佐藤誠之先生より「後期高齢者になったら、いつ認知症になっても不思議ではない。書きたいことは、どんどん書いた方がよい」というアドバイスを頂戴しました。

昔から、法律の本と病気の本を書いたら哲学の本を書きたい、と考えていましたが、まだまだ未熟で、それはもっともっと多くのことを体験し、しっかりとした経験則が完成してからと考えていました。

ですが、文字通り光陰矢の如しを実感していたところへ佐藤先生からのアドバイスが重なりました。これも縁と思い、見切り発車となりますが、哲学の本を書いてみることにしました。いつもの通り、この事務所便り『的外』でその骨子を述べたうえで発刊したいと思います。

まず、今回は「はじめに」と「第1段 16才の少年の遺書」の部分の原稿を転載します。

76年間生かされてきて「人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょ



に、楽しみ尽くすのみです」という考え方が現時点における私の哲学です。『いなべんの哲学』とか『いなべんフィロソフィー』と呼んでいますが、この世をどう生きたら楽しく生きられるか、という老人の知恵学ともいうべきものです。しばらくの間、お付き合い戴ければ幸甚です。

## はじめに

平成29(2017)年5月20日で暦年齢は75才となり、後期高齢者と呼ばれる身となりました。若い頃、あれほど死にたくないと思ったことが嘘に思えるほど、年を取ったことに対する不安がなくなりました。何故だろうと思うことがあります。

暇潰しに、その何故だろうの答えを見付けてみようかと思いました。

暇潰しですから、他人<sup>ひと</sup>を巻き込むようなことではないのですが、いっしょに考えたり、語り合ったりする人がいた方が楽しいものですから、答えを見付け出すプロセス(過程)を一冊の本にまとめて、関心のある方にお読み戴くことにします。

いっしょに考えてもらい、意見を交換できたら楽しい気がするのです。私の体験を素直に述べますので、それを叩き台にして、いっしょに人生を語り合いましょう。

本のタイトルは、『人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くすのみです』という<sup>くだ</sup>砕けたものですが、人生はどう生きるべきかという内容ですので、副題は、生意気ですが『いなべんの哲学』としました。



「哲学」と言うと難しい気がしますが、長く生きた者の、この世を生きる知恵です。誰にとっても身近なことです。軽くジャブを繰り出すように、気軽に、いっしょに語ってもらえれば幸甚です。

若い頃にはここまで生きるとは思いませんでしたが、あっという間に後期高齢者となりました。お陰で色々なことが体験できました。その体験をベースに人生を語ってみたいのです。

この本を話の切っ掛けに、人生を語り合いたいのです。酒を舐めながら、或いはコーヒーとケーキを頂きながら、身近な仲間と語り合いたいのです。

平成30(2018)年8月1日

田舎弁護士 千田 實

## 第1段 16才の少年の遺書

がんとう の かん  
巖 頭 之 感

ゆうゆう かなてんじょう  
悠々たる哉天壤、

りょうりょう かなここん  
遼々たる哉古今、

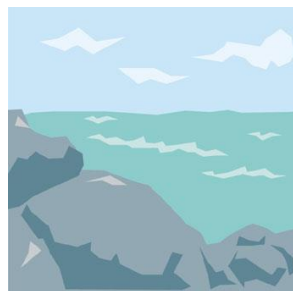
五尺のしょうく小軀を以て此大をこのだいをはからむとす。

ホレーショのてつがくついで哲学竟に何等のオーソリティー

をあた價するものぞ。

ばんゆう の真相は唯一言にしてつく悉す、

曰く、「不可解」。



我この恨<sup>うらみ</sup>を懐<sup>いだ</sup>いて煩悶<sup>はんもん</sup>、

終<sup>つい</sup>に死を決するに至る。

既に巖頭<sup>がんとう</sup>に立つに及んで、

胸中何等の不安あるなし。

始めて知る、

大なる悲観は大なる楽観に一致するを。



この文章を私流に噛み砕いてみます。読者諸氏は、夫々の解釈をしてみてください。

タイトルの「巖頭之感」は、巖頭とは、岩の上という意味ですから、「岩の上に立って、思うこと」というような意味になりそうです。

この文章を書いた藤村操<sup>みさお</sup>（以下「操」と言うことにします）は、岩の上から滝壺にいままに身を投げようとしていたのです。そのときの思いを傍<sup>かたわ</sup>らのミズナラの木に彫った文章です。死を前に書き置いた遺書です。

「巖頭之感」は実を射たタイトルだと感心します。

事前に考えていたタイトルだったのでしょうか。死を目の前にし、16才の少年が、このようなタイトルを付けたのです。その冷静さに驚愕<sup>きょうがく</sup>します。

ですが、私の目の前で自ら死んでいった多くのクライアント（依頼人）を思い出してみますと、その殆どの人は、死を決めた後は感情に左右されず、落ち着いていました。悩んで、もたえ苦しんだ末に死を決した人は雑

念がなくなるのでしょうか。潔いさぎよくなり、もう悪足掻わるあがきはしません。清すがすが々しい印象さえ受けました。操も死を覚悟していたのですから、冷静だったのではないのでしょうか。これだけの文字を立木に彫ったのですから、冷静だったのでしょうか。なんだか凄しみいという思いが湧いてきます。

書き出し部分の「悠々たる哉天壤」とは、限りない空間という意味ですから、どこまで続いているのか分からない大宇宙ということになるのでしょうか。操は、宇宙はどこまで広がっているのだろうか、と思い続けていたのでしょうか。

続く、「遼々たる哉古今」とは、はるかに遠い昔と今という意味ですから、時間はどこから始まりどこまで続いていくのかと思い続けていたのでしょうか。



この文章からは、操は、宇宙はどこまで広がっているのだろうか、時間はどこまで続いているものなのか、などと考えてはいたということは、容易に想像できます。

16才の少年は、これまで学んだ知識を頼りにそんなことを考えていたのでしょうか。ですが、答えは分からなかった筈です。私も16才当時から76才の今日に至るまで、同じことを考え続けています。この点については、解答は見付けられず、全く成長していません。自然科学的には、まだそれは分かっていないのではないのでしょうか。

「五尺の小軀を以て此大をはからむとす」とは小さな存在に過ぎない人間が、この宇宙や時間について、分かろうとしている、という意味でしょうか。

「五尺の小軀」と言っているのは、身の程知らずを強調しているのですし



よう。どこまで広がっているか分からない空間、どこから始まり、どこで終わるかも分からない時間、人間ごときに分かる筈がないと操はあきらめたのでしょうか。

「ホレーショの哲学竟に何等のオーソリティーを價するものぞ」の部分は、「ホレーショ」は人の名前なのですが、哲学者か小説などの登場人物なのでしょうか。私にはその人物がよく分かりませんので、語る資格はありません。深入りはしないことにします。

「オーソリティー」は「権威者」などという意味ですから、どのような深い知識や意見の持主であっても、優れた哲学者であっても答えは出せない、という意味になるのでしょうか。

操は、宇宙や時間などについても、考えに考えたのでしょう。しかし、分からなかったのです。そして、彼はどんな人が考えても分からない問題と意識しながらもなお、そのことでもだえ苦しんだのでしょう。

誰も分からないのだから、「仕方がない」位に考えれば死なずに済んだ気もします。一途に思い込むのは若者にはありがちな気がします。

操は仕方がない、などとは思わず、あくまでも真相を探究し、苦悩しました。その結果、出した結論は、「萬有の真相は唯一言にして悉す、曰く、『不可解』」だったのです。

「不可解」とは、「どうしても理解できないこと」、「わけがわからないこと」(角川必携国語辞典)ですから、萬有すなわち宇宙にある全てのものはわけが分からない、という判断に至ったのです。「それはそれとして」という考えが、人生を楽しく生きるためには不可欠なのですが、16才の操には、そのような心の切り替えができなかったのでしょう。







若い時代は、誰でもこのような思いに至るのではないのでしょうか。ですから、ここまでの操の書いている部分は、抵抗なく共鳴できます。

私も、中学生後半からは、「萬有の真相は唯一言にして悉す、不可解」と悩みました。このことが気になって、何事に対しても身が入らない時代が長く続きました。そのことばかり気になって、何事に対しても身が入らない状態はその後の人生経験を経て脱しましたが、その疑問は、60年昔の中学、高校時代から、後期高齢者となったいまも根本的には解決していません。只、若い頃と根本的に違うのは、「それはそれとして」という心のたらしきができるようになりました。

物理的・科学的見地からは、「不可解」ですから、そのことを考えると、寝付けられないことがいまでもあります。「不可解」は、死ぬまで続くことになると思います。

科学がどれほど進もうと、解らないことは次から次へと出てくるのです。大宇宙の果ての果てのその先はどうなっているのだろうか、さらにその先はと、果てしなく続く筈です。時間も百年後は、万年後は、億年後は、そしてその先はと果てしなく続く筈です。ですから、「不可解」ということになる筈です。

ここまでの巖頭之感には、心底より共鳴します。NHKテレビのチコちゃんに「ボーっとして生きている」と指摘されるような人でなければ誰でもこの問題に関しては、「その通りだ」と感じるだろうと思います。

ここまでの操の書いていることは、私も若い頃には同じ思いだったし、いまなお同じです。深く共鳴します。操が「不可解」と結論付けたことに對し、そのとおりで感じています。



ここまでは高校生だった60年前と、後期高齢者となった<sup>いま</sup>現在と大きな変化はありません。操が後期高齢者となるまで生きていたら、どうだったでしょうか。変化があったでしょうか。何か解ったでしょうか。多分解らなかったと思います。

「不可解」はそのままであったとして、いくつまで自殺を考えたでしょうか。いつの時点かで、別な生き方を見付け出したでしょうか。興味津々です。私の経験では、どこかの時点で、それはそれとしての生き方を見つけたのではないかという気がするのです。

この後の文章、つまり操の「不可解」という結論を出した後の考え方、生き方、死に方が問題だと思います。その問題を考えることが、この本の核心部分となります。

とりあえず「巖頭之感」の後半の文章をそしゃくしてみます。この先の文章は特に難解なところもなく、噛み砕く作業など不要な気もしますが、少し小分けにして読んでみます。

「我この恨みを懐いて煩悶、終に死を決するに至る」とあります。

「この恨み」とは、萬有の真相つまり、時間や宇宙について、その真相を追究し切れなかったということに対し、悔しくて、憎んで忘れることができない状態になった、というようなことではないでしょうか。そのため「煩悶」つまり悩んで、もたえ苦しんだ挙句に、自殺しようと思ったということになりそうです。

「既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし」の部分は、死を澗し、滝に身を投げて自殺を決行しようとして、滝の上の岩の上に立った



ら不安もなくなった、と述べています。

ここに至れば、不安などないだろうと思います。自殺を決断するまでは、悩みもがいたと思いますが、腹を決め自殺を決行する段階になれば、悩みもなくなるのではないのでしょうか。

「始めて知る、大なる悲観は大なる楽観に一致するを」は、この遺書の核心というか結論というべき部分です。

操が「悲観」と「楽観」を、どの程度掘り下げてこの言葉を使ったのかが分かりませんが、一般に使われている国語辞典では、「悲観」とは、「希望を失って、ものごとを暗い方へばかり考えること」、「楽観」とは、「ものごとが都合がよく運ぶと考えて、心配しないこと」（いずれも角川必携国語辞典）というように説明されています。

操も、どうしようもないほど不安だったのに、自殺を決行しようとしたら心配がなくなった、という印象を述べたものだと思います。

ここまで冷静に自分の心のはたらきを観察し、書き残した操の一連の行動には感嘆してしまいます。

操自身は、私の前記のような解釈以上の深い意味を込めて、「大なる悲観は大なる楽観に一致する」と書き残したのかもしれませんが。そこを深めてみたい気がします。

浅学非才の身を以って、まさに「五尺の小軀を以って」という言葉通りですが、わずかに学んだ知識と76才まで生かされ経験して印象に残った経験則を基に、この問題に挑戦してみたいと思います。





# 新刊書の紹介



## 『いなべんの医療に関する本（黄色い本）20冊発刊記念 一病を楽しむ生き方を語る その1 心を前向きにして楽しむ』

平成30（2018）年9月中には、上記の新刊書が発刊されます。「超高齢化時代」、「人生百年時代」と言われる現在、高齢と病気や、介護をしてもらうことと、介護をしてやることを楽しまなければ長い老人生活を楽しむことはできません。

これまで、『長生きを楽しむコツ』（桜色の本）シリーズで、老人の童話と題して、長生きを楽しむコツをランダム（思いつくまま）に第14巻まで発刊してきました。『いなべんの医療に関する本』シリーズの20冊発刊を記念し、老人にとっては日常生活の重要な部分となっている病を楽しむ生き方に絞って『病を楽しむ生き方を語る』シリーズを発刊することにしました。

本書は、そのシリーズの1として、『心を前向きにして楽しむ』を述べています。「心が変われば行動が変わる、行動が変われば習慣が変わる、習慣が変われば性格（人格）が変わる、性格（人格）が変われば運命が変わる」ということを実感しています。

いまの立っている位置で、向く方向を変えると、進んでいく方向は全く違ってきます。そんなことを10回以上の手術や人工透析の体験を通じて身に染みしました。その体験に基づき『病を楽しむ生き方を語る』その1として、『心を前向きにして楽しむ』を近日中に発刊しますので、そのことを予告させて戴きます。

